

新しい GCSE 音楽の内容と評価に関する研究

—AQA と OCR がそれぞれ作成した新シラバスの検討を通して—

松下友紀

(本講座大学院博士課程後期在学)

Assessment and Content of the New Music GCSE: Focusing on the New AQA and OCR Specifications

Yuki MATSUSHITA

I. はじめに

GCSE (General Certificate of Secondary Education) 試験とは、中等教育の義務教育修了段階に受験する資格試験である。QCA (Qualification and Curriculum Authority)¹ が作成した全国基準に従って、5つの試験団体 (exam board) がシラバスを作成し、試験を実施し、グレードの付与を行う。

2007年にGCSE試験で実施される科目の全国基準が改訂された²。2008年、各試験団体は新しい試験シラバスを作成・公表し、2009年より新シラバスに基づく課程が開始された。そして新しい制度による初めての試験は2010年に実施された。本研究では、AQA (Assessment and Qualification Alliance) と OCR (Oxford Cambridge and RSA Examinations)³ がそれぞれ作成した新シラバスの検討を通して、2007年の改訂でGCSE音楽の内容と評価がどのように変化したのかを明らかにすることを目的とする⁴。

II. 改訂の概要

2007年に行われたGCSE試験の改訂は、中等教育段階のカリキュラムと資格試験制度の見直しを目的とする教育改革の一部として行われた。今回の改訂のねらいとしてQCAは以下の6点を挙げた⁵。

- ・試験内容を変更する。
- ・指導、学習、および評価を革新する。
- ・14歳から19歳を対象とするカリキュラムの内容を組み込む。
- ・新しい教育資格 Diploma を補完する。
- ・ナショナル・カリキュラムに基づく成績評価計画を見直す。
- ・標準を維持する。

今回のGCSE試験の改訂において、特に重要視されているのが内部評価の改善である。1986年の導入当初から取り入れられていた内部評価はコースワークと呼ばれ、外部による最終試験⁶では評価できないものを学校での学習活動の中で評価するためのものとして位置づけられてきた。GCSE音楽の場合は、作曲技能と演奏技能を評価する際にこのコースワーク評価が用いられてきた。

¹ QCAはQCDA (Qualification and Curriculum Development Agency)へと組織の名称を変更した。

² 1986年のGCSE試験導入以後これまで、GCSE音楽の全国基準については、1995年と2000年に改訂された。

³ GCSE試験の管理・運営にあたる試験団体 (awarding body) は、イングランドとウェールズ合わせて5つある。AQAとOCRはともにイングランドにある試験団体である。

⁴ 本研究の対象は新シラバスのみである。GCSE試験シラバスの法的枠組みとなる全国基準の変化については拙稿「GCSE音楽の全国基準の変遷」『音楽文化教育学研究紀要』XXI, 2009, pp.161-170を参照されたい。

⁵ QCAウェブページ http://www.qca.org.uk/qca_15976.aspx (2008年10月1日閲覧)。

⁶ Ofqualウェブページ <http://www.ofqual.gov.uk/qualification-and-assessment-framework/89-articles/11-gcse> (2011年3月16日閲覧)

⁷ 多くの場合、筆記試験として行われる。

QCA の調査により、外部評価、内部評価が多義的に使用されているという現状が明らかになった⁷。さらに、コースワーク評価での教員による採点が適切に行われていないことなどが問題点として指摘された⁸。QCA は、すべての GCSE 試験科目を、知識・理解重視型と実際の能力・活動重視型の 2 つに分類し、前者では内部評価を削減あるいは削除し、後者では内部評価を維持する方針を示した⁹。音楽については、前もって行われた QCA の調査により、音楽科の教員がコースワーク評価について非常に肯定的な考え方を有していることが明らかとなった¹⁰。そのために、教員の考え方や教科の特質を鑑み、音楽は実際の能力・活動重視型の科目として位置づけられた¹¹。

評価の正当性を保つために、今回の改訂によって導入されたのが **controlled assessment** である。新たな内部評価の方法では、(a) 課題設定を試験団体がいき、採点を教員が行う、(b) 課題設定を教員が行い、採点を試験団体がいき、のどちらかを選択して行うよう統一された¹²。

また、これまで同一科目であっても、試験団体ごとに内部評価と外部評価の割合が異なっていたが、今回の改訂によって科目ごとに内部評価と外部評価の割合が明確に定められた。科目ごとに割合は異なるが、①0%：100%、②25%：75%、③の 3 つのいずれかで評価されることとなった¹³。音楽については、③60%：40%を採用することとなった。

さらに、試験内容についても見直しがなされた。GCSE 音楽については導入以後約 20 年が経過した近年に、初めて評価内容・評価方法の見直しがなされ、その報告書が 2007 年に公開された。その報告書において、QCA の検閲者が GCSE 音楽の試験内容について指摘したことをまとめると以下のとおりである。

【評価すべき点】

- ・ キーステージ 1 から 3 までの学校のカリキュラムにおける内容に基づいた試験がなされている。
- ・ 西洋古典派だけでなく、ジャズやポピュラー音楽、ワールドミュージックなど、多様な時代、文化から音楽が選択され、幅広い学習領域を形成している。
- ・ 主たる 3 つの音楽活動が密接に結びついており、創造的・統合的な活動が展開されている。作曲の配点は高く、創造的発展により重きが置かれている。
- ・ 作曲や演奏が義務付けられたことで、受験者は直接的に音楽を経験している。
- ・ 幅広く音楽を扱うことで、多くの受験者にとって身近なものとなっている。

【問題点】

- ・ 伝統的なセットワークから開かれた学習領域へと移行している。セットワークに基づく詳細な知識を要求しなくなった。
- ・ 聴覚の知覚力について要求される水準が低下している。形式的な聴音が実施されていない。
- ・ 音楽史については深さよりも広さにより重きが置かれている。
- ・ メロディーや和声法、対位法など、音楽の技法を学習することが要求されていない。
- ・ より高いグレードを得るための演奏の水準が低下している。技術のコントロール、解釈、音楽的な表現、コミュニケーションといった観点から評価が行われ、より高い得点を得るために簡単な曲を演奏するように指示されている。
- ・ 視唱、即興演奏はもはや評価されない。
- ・ 筆記試験は、短文による解答、多肢選択によって構成されており、エッセイ形式の解答で要求されるような書く力が要求されなくなった。音楽の読み書き能力の要求も欠如している。

(QCA, *Review of standards in A level and GCSE music*, QCA, 2007, pp.11-12, 28-29より訳出し作成。)

以上のように、評価の側面、内容の側面から再検討がなされた後、2007年に新しい全国規準が導入された。

Ⅲ. AQA が作成した新シラバスの検討

1. 内容

(1) 知識・理解

全国規準の学習領域の規定に大きな変化は見られなかったが、試験シラバスでは、学習領域の構成がテーマによるものから音楽の諸要素によるものへと変化した。改訂された全国規準に基づいて、AQA の試験

⁷ QCA, *A review of GCSE coursework*, QCA, 2006, p.6.

⁸ Ibid., p.15.

⁹ Ibid., p.17.

¹⁰ QCA, *Teachers' Views on GCSE Coursework Research Study Conducted for the QCA final report*, QCA, 2006, p.28.

¹¹ QCA, op. cit., 9., p.20.

¹² QCA, *Teachers, headteachers, seniors, local authorities, Change to GCSEs*, QCA, 2008.

¹³ QCA, *GCSE controlled assessment regulations*, QCA, 2008, p.4.

シラバスでは「リズムと拍子」、「和音と調」、「テクスチュアと旋律」、「音色と強弱」、「構造と形式」の5つの学習領域が設定されている。また、5つの学習領域に共通する学習事項として、「西洋古典の伝統」、「20世紀および21世紀のポピュラーソング」、「ワールドミュージック」が挙げられている。評価のための課題はこの学習領域の内容に基づく(表1)。

表1 AQAの求める知識・理解

リズムと拍子 <ul style="list-style-type: none"> 拍子 単純拍子/複合拍子 規則拍子/不規則拍子/自由拍子 拡大, 縮小, ヘミオラ, クロスリズム <ul style="list-style-type: none"> 付点リズム, 三連符, シンコペーション テンポ, ルバート ポリリズム, bi-rhythm ドラムフィル 		
和声 <ul style="list-style-type: none"> 全音階音程, 半音階の音程 協和音, 不協和音 ヘダル, ドローン 終止形: 完全終止, 変格終止, 不完全終止, 偽終止, ビカルディの3度 調和音, 短和音, 属七の和音をローマ数字の記号を用いて識別する。 		
調 <ul style="list-style-type: none"> 調性, 長調, 短調, モード旋法 4つまでのシャープとフラットを識別し, 使用する <ul style="list-style-type: none"> 転調: 属調, 下属調 関係調 		
テクスチュア <ul style="list-style-type: none"> 和声, ホモフォニー, 多声音楽, 対位法 模倣, カノン, 階層 ユニゾン, オクターブ, 単旋律, 伴奏のある旋律, 交誦 		
旋律 <ul style="list-style-type: none"> オクターブ以内の音程 順次進行, 跳躍, 分散和音, 音階, アルペッジョ 経過音, アッチャッカトゥーラ, アッポジャトゥーラ ブルーノート 全音階音程, 半音階の音程, ペンタトニック, 全ての調, 旋法 拡大, 縮小, 反復進行, 転回 <ul style="list-style-type: none"> スライド/グリッサンド/ボルタメント, 装飾音 オスティナート, リフ フレージング, アーティキュレーション ビッチをバンドする 即興 		
音色 <ul style="list-style-type: none"> 独奏曲, 協奏曲, 室内楽, ポップス, 声楽曲に見られる, 単独あるいは組み合わせて用いられる楽器と歌 民族音楽における特有な楽器群 テクノロジーを用いた音, 機械やコンピュータによって作り出された音, サンプリング, 反響やひずみなどの技術を用いた音 ファルセットやビブラートなどの声楽的な技術 		
強弱 <ul style="list-style-type: none"> 次のような強弱の変化 -pp, p, mp, mf, f, ff -cresc., crescend, dim., diminuend -sfz, sforzando -クレッシェンド, デクレッシェンドを表す記号 強弱に関する共通の記号と用語 		
構造と形式 <ul style="list-style-type: none"> 二部形式, 三部形式, 呼びかけと応答 ロンド, 主題と変奏, arch-shape ソナタ, メヌエットとトリオ, スケルツォとトリオ 有節歌曲, 通作歌曲, ダカーポアリア, 循環形式 ポピュラーソングの形式 グランドバス, 通奏低音, カデンツァ <p>(ユニット2のみ)</p>		
作曲家, 演奏者, 聴衆 <ul style="list-style-type: none"> 意図, 用法, 目的 委託, パトロネジ 技術的あるいは感情的要求 <ul style="list-style-type: none"> アマチュアかプロか 演奏の練習, 解釈, 即興 		
時・場所・場合 <ul style="list-style-type: none"> 宗教的, 世俗的, 実用的 私的, 公的, コンサート ライブ, 録音, 媒体 <ul style="list-style-type: none"> インターネット 演奏上の伝統 		
a) 西洋古典の伝統 <ul style="list-style-type: none"> バロックの管弦楽曲 協奏曲 声楽曲 (オペラ, 歌曲, 合唱) 室内楽 ソナタ 	b) 20世紀と21世紀のポピュラー音楽 <ul style="list-style-type: none"> ブルース 1960年代のポピュラー音楽 ロック, R&B, ヒップホップ 音楽劇場 映画音楽 	c) ワールドミュージック <ul style="list-style-type: none"> カリブの音楽 アフリカの音楽 インドの音楽

(AQA, GCSE specification Music, for exams June 2010 onwards, for certification June 2011 onwards, AQA, 2008, pp.6-8から訳出し作成。)

(2) 技能・能力

各評価ユニット（後述）で使用される採点基準の評価項目をみることで、評価対象として定義された各技能が具体的にどのように捉えられているかを知ることができる。表2は、各評価対象とその評価項目をまとめたものである¹⁴。

表2 AQA の評価対象とその評価項目

評価対象	評価項目	
	ソロ	アンサンブル
AO1 演奏技能	<ul style="list-style-type: none"> ・演奏の水準 ・正確さ ・コミュニケーション ・解釈 	<ul style="list-style-type: none"> ・演奏の水準 ・正確さ ・コミュニケーションと解釈 ・アンサンブルへの理解
AO2 作曲技能	<ul style="list-style-type: none"> ・音を想像的に使用しているか。 ・音楽的なバランス感があるか。 ・音楽のアイデアを創造し、発展させているか。 ・選択した楽器について理解しているか。 ・楽器や声、その他の音素材を適切かつ特徴的に使用しているか。 ・音楽の要素、仕組み、技術、伝統的手法を適切に使用しているか。 	
AO3 聴取・評価技能	<ul style="list-style-type: none"> ・作曲が成功していることを理解しているか。 ・作曲の過程を正確に記述しているか。また、作曲の過程で発生した問題を解決しているか。 ・音楽の要素、特徴、伝統的手法を理解しているか。 ・幅広く音楽用語を使用しているか。 ・記述に文法的な誤りがないか。 	

(AQA, GCSE Specification Music, for exam June 2010 onward, for certification June 2011 onwards, AQA, 2008, pp16, 21, 24より作成。)

2010年試験シラバスではソロとアンサンブルで「コミュニケーション」が評価項目となった。この項目は、演奏に専念しているか、自信や説得力のある演奏であるか、よく計画された演奏であるかが評価される。2003年試験から2010年試験のシラバスにおける、評価項目の「表現」に近いが、より具体的に記述されている。AO2：作曲技能については、全国標準の記述は多少変化したが、シラバスでの評価項目では大きな変化は見られない。AO3：聴取・評価技能については、音楽用語を使用すること、自分の音楽や他者の音楽について価値判断ができることと捉えており、大きな変化はみられない。

2. 評価

2010年試験シラバスにおいて、評価を構成するのは、「ユニット1：聴取と評価」、「ユニット2：作曲と評価」、「ユニット3：演奏」、「ユニット4：作曲」の4つである。

シラバスの記述に依拠し、各評価ユニットの概要を述べる¹⁵。ユニット1は、音楽聴取を伴う筆記試験である。シラバスで設定されている5つの学習領域に基づいて出題され、各学習領域に関連する知識・理解が問われる。ユニット2では、作品1つを作り、その作曲の過程と成果を自己評価する。ユニット3では、ソロ1曲とアンサンブル1曲が採点される。ユニット4では、作曲作品1曲が採点される。ユニット2とユニット4の作曲については、5つの学習領域から2つ以上学習したことを示すような作品をそれぞれ提出することが要求されている。

表3は、各ユニットで評価される評価対象とその配点比率を表したものである。ユニット1およびユニット2は外部評価で、ユニット3およびユニット4は内部評価である。評価対象については、AO1：演奏技能については内部評価のみになった。評価全体で評価対象の配点比率は、AO1：演奏技能が40%、AO2：作曲技能およびAO3：聴取・評価技能がそれぞれ30%である。

¹⁴ AO3：聴取・評価技能の評価項目については、「ユニット2：作曲と評価」で示されている評価基準から作成した。「ユニット1：聴取と評価」における筆記試験で音楽に関する知識・理解が測られるが、これについては、この表に含めていない。

¹⁵ AQA, GCSE Specification Music, for exam June 2010 onwards, for certification June 2011 onwards, AQA, 2008, p.7.

表3 AQA の評価計画

評価対象	評価の構成 (%)				評価対象の比重の合計 (%)
	外部評価		内部評価		
	ユニット1: 聴取と評価	ユニット2: 作曲と評価	ユニット3: 演奏	ユニット4: 作曲	
AO1: 演奏技能			40		40
AO2: 作曲技能		10		20	30
AO3: 聴取・評価技能	20	10			30
合計 (%)	20	20	40	20	100

(AQA, GCSE Specification Music, for exam June 2010 onwards, for certification June 2011 onwards, AQA, 2008, p.32より抜粋。)

評価において、今回の改訂で見られた変化の1つが2種類の採点基準の採用である。従来の試験では、AO1: 演奏技能を評価する際、使用される楽器に関係なく1つの採点基準が使用されてきた。2011年試験シラバスでは、ユニット3で音楽テクノロジーを使用したソロの演奏を評価するために別の評価基準が設けられている。

IV. OCRが作成した新シラバスの検討

1. 評価内容

(1) 知識・理解

OCRのシラバスでは、以下のような知識・理解の習得が要求されている(表4)。

表4 OCRの求める知識・理解

<p>楽譜</p> <ul style="list-style-type: none"> ・全音符から16分音符まで、全体符から16分休符まで。符点、三連符を含む。 ・音名と、G1からCIIまでの高音譜表におけるそれらの位置。 ・譜表、楽譜 ・高音部記号、低音部記号 ・縦線と複縦線、リピート記号 ・調号。3つまでのシャープ・フラットのついた調 ・拍子記号: 2拍子、3拍子、4拍子、複合2拍子 ・シャープ、フラット、ナチュラル ・フレージ記号、タイ ・装飾音とその記号: トリル、ターン、モルデント、アッチャッカトゥーラ、装飾音
<p>リズム</p> <ul style="list-style-type: none"> ・アウフタクト、アップビート ・オフビート、シンコペーション、符点リズム ・拍子と拍 ・休止と静寂 ・クロスリズム・ホリリズム ・スウィング ・タラ(インド) ・クトゥ、ゴンガン(ガムラン) ・ゾン、クラウヴェ(サルサ) ・chaal
<p>旋律・音高</p> <ul style="list-style-type: none"> ・順次進行、音階音、経過音、跳躍 ・音程: ユニゾン、2度、3度、4度、5度、6度、7度、オクターヴ ・音階: 長調、短調、半音階、ブルースの音階 ・ラーガ(インド) ・スレンドロ、ヘログ(ガムラン) ・音域 ・バンド、スライド、グリッサンド
<p>和声</p> <ul style="list-style-type: none"> ・全音階的、不協和、無調、半音階 ・和音: 長和音、短和音、七の和音、トニック、ドミナント、サブドミナント、ブルーノート ・終止: 完全終止、不完全終止、変格終止、偽終止

<ul style="list-style-type: none"> ・ブロックコード、アルペジオ／分散和音、三和音、ジャズやブルースの伴奏 ・主和音、簡単な和声、和声的進行、和声のリズム ・転調：トニック、サブドミナント、ドミナント、関係長調、関係短調、 ・ドローン ・ブルースにおける 12 小節の標準的和声進行
<p>テンポ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ラルゴ、アンダンテ、モデラート、アレグロ、ヴィヴァーチェ、プレスト ・アッチェランド ・ラレントアンド／リテヌート ・アラルガンド ・ルバート ・休止
<p>強弱</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ <i>ff</i> から <i>pp</i> まで、クレッシェンドとディミニユエンド、記号と意味 <p>アーティキュレーション</p> <ul style="list-style-type: none"> ・スタッカート、タンギング、レガート／スラー ・ピッチカート、アルコ
<p>楽器とアンサンブル・音色</p> <ul style="list-style-type: none"> ・標準的なオーケストラの楽器と楽器群 ・ピアノ ・通奏低音：チェンバロ、オルガン、チェロ ・オーケストラ、プラスバンド、吹奏楽、木管五重奏、弦楽合奏、弦楽四重奏、二重奏、三重奏、ジャズグループ ・電子的な楽器、ポピュラー音楽の楽器 ・ジャズ、インドの音楽、古典的な音楽、ガムラン、サルサ、バングラ、アメリカのフォークやアイルランドのフォーク
<p>声とアンサンブル・音色</p> <ul style="list-style-type: none"> ・声：ソプラノ、メゾソプラノ、アルト／コントラルト、テノール、バリトン、カウンターテナー、 ・アカベラ ・シラブル型、メリスマ型 ・ソロ、リードする歌手、伴奏つきの歌、合唱 ・スキヤット ・word painting ・ソネーロ、ショーロ
<p>旋律、作曲上の仕組み</p> <ul style="list-style-type: none"> ・繰り返し、反復進行、模倣、オスティナート ・展回、 ・十二音技法における反行形、逆行形 ・対話調の楽曲、問いと答えのフレーズ、呼びかけと応答、サルサの
<p>テクスチャー</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ソロ、単旋律、 ・ホモフォニー、和音 ・多声音楽、対位法、 ・ユニゾン、
<p>構造</p> <ul style="list-style-type: none"> ・二部形式、三部形式、ロンド、変奏曲 ・有節歌曲、通作歌曲 ・グラウンドベース ・輪唱、カノン、フーガ ・前奏、コーダ、経過部、tag ・カデンツァ ・ヴァースとコーラス ・楽器による間奏部、ミドルエイト (32 小節からなるポピュラーソングの 17 小節目から 24 小節目までの 8 小節) ・アメリカのラインダンスにおける basic, restart, wall
<p>大きい構造</p> <ul style="list-style-type: none"> ・協奏曲、交響曲、ソナタ、オラトリオ ・室内楽：弦楽四重奏、木管四重奏、コンチェルト・グロッソ
<p>音楽的な時代</p> <ul style="list-style-type: none"> ・バロック、古典派、ロマン派、現代
<p>テクノロジー</p> <ul style="list-style-type: none"> ・シンセサイザー、ドラムマシーン、ミキシングデスク、シークエンサー、マルチトラック、オーバーダビングでかぶせた音、サンプリング楽器、スクラッチ、DJ、 ・コンピュータによる効果、リヴァーブ、エコー、ひずみ、アタック、遅延を電氣的に作り出す装置 ・ボコーダ、量子化 ・リミックス、寄せ集め、オーバーレイ
<p>舞踏の様式</p> <ul style="list-style-type: none"> ・タンゴ：アルゼンチンのタンゴ、舞踏場のタンゴ、電子的なタンゴ、 ・アメリカのラインダンス：カントリーダンス、西洋のダンス、フォークダンス、ハッスル ・アイルランドのダンス：ステップダンス、リール、ジーク、スリッパジグ、ホーンパイプ、ケーリーダンス ・ディスコやクラブのダンス：アシッドハウス、レイブ、テクノ、ジャングル、ドラムンベース、ガレージ、トランス、環境音楽

(OCR, GCSE music Version I September 2008, OCR, 2008, pp.16-18 より訳出し作成。)

(2) 学習領域

OCR の試験シラバスで設定されている学習領域は「学習領域 1：私の音楽（私の楽器に焦点を当てて）」、「学習領域 2：共有された音楽（音楽的な関係性と規則）」、「学習領域 3：ダンス音楽」, 「学習領域 4：描写的な音楽」の 4 つである。表 5 は各学習領域における学習内容をまとめたものである。

表 5 OCR の学習領域

<p>学習領域 1：私の音楽（私の楽器に焦点を当てて）</p> <p>【学習内容】 自分が演奏する楽器について、以下に関して学習する。 ①音域、特徴的な音色、技術的な強みと限界 ②多様なジャンルにおける使用、アンサンブルへの影響 ③楽器の用いられ方に影響を与える文化的影響</p>	<p>○自分の能力の範囲内で、また選択したジャンルや様式の中で、習得した理解を演奏する曲の学習に応用する。 ○曲の背景、自分の楽器の役割、演奏で用いられている演奏の技術を学習する。 ○ビートボックスや DJ などの演奏に関しては、曲の学習で得た技術が即興演奏となりうる。</p>
<p>学習領域 2：共有された音楽（音楽的な関係性と規則）</p> <p>【学習内容】 以下の 3 つを探究することによって、様式や文化的背景が作品にどのように影響しているかを学習する。 ①伴奏によってソロパートがどのように支えられ、高められているか ・ある楽器によって伴奏されている歌 ・アンサンブルをリードしている歌または楽器 ②アンサンブルの中でどのように各パートが組み合わされているか ③合唱における音楽の力が与える影響</p>	<p>【具体的な学習内容】 ○歌と楽器の関係とその役割について学習する。 ①歌と伴奏 ・ロマン派の歌曲・ポピュラーのバラード ②オーケストラやバンドを伴い、ソロの楽器を含む音楽 ・古典的な協奏曲・ジャズ ③アンサンブル ・インドの古典的音楽・ガムラン ・バロックや古典派の室内楽 ④規模の大きい歌のアンサンブル ・有名な合唱歌 ・アフリカのアカペラの歌 ○作曲家や演奏者の名前を知る。 ○楽器や歌の関係性が、時代を超えてどのように変化し、あるいは維持されているかを知る。 ○演奏家が自分の楽器を学ぶ方法、自分の音楽をコミュニケーションする方法を学ぶ。（楽譜を通じて、あるいは即興のマナーにおけるリーダーに従うことによって） ○アンサンブルへの相互作用に影響を与えるコンテキストの特徴（場、入手可能な楽器、文化的環境を含む）を学習する。</p>
<p>学習領域 3：ダンス音楽</p> <p>【学習内容】 社会的・歴史的・地理的に対照的な背景から選ばれた以下の 3 種類の社会的舞踏において特徴的な点、リズムのパターンを学習する ①ベアのダンス ・ワルツ ・ラテンのダンス（タンゴ、サルサ） ②グループや民俗、シンクロナイズしたダンス ・ラインダンス（アメリカのダンス、アイルランドのジューゲヤリール） ・バングラ ③即興的なダンス ・ディスコ ・クラブダンス</p>	<p>【具体的な内容】 ○舞踏の各様式の起源となる背景、または文化的背景 ○各舞踏の音楽的特徴（構造、テンポ、拍子、リズム、楽器編成） ○音楽と舞踏のステップとの関係 ○場や時が音楽の構造化や演奏のされ方に与える影響 ・モダンダンスにおける音楽テクノロジーの影響 ・楽曲の作曲家や演奏者の名前 ・舞踏音楽の原則についての理解を他の舞踏様式に適用させる。</p>
<p>学習領域 4：描写的な音楽</p> <p>【学習目標】 ロマン派から現代までの描写的音楽を学習する。①②の音楽から、作曲者が物語を伝え、イメージを描き、シーンを配置するためにどのように音楽を用いているかを探求する。 ①標題音楽（1820 年から現在までの交響曲） ②映画音楽</p>	<p>【具体的な学習内容】 ○以下の 3 つを表現するために作曲者がどのように音楽を用いているかを探求する。 ①物語、イメージ、場面 ②雰囲気、感情 ③ドラマ、動作 ○作曲者の名前を知る。 ○描写するという目的のもと、音楽の要素・仕組み・調・構造を使用して、どのように音を組織化しているかを知る。 ○楽器、伝統的手法、過程、音楽テクノロジーの使い方を探求する。 ○描写的な音楽の違い（音楽がもたらすべき意味、作曲者が支配している構造）、映画音楽の違い（映画の作り手によってすでに設けられた構造の中で動作や行動を音によって完成させること）を学習する。</p>

(OCR, GCSE music Version1 September 2008, OCR, 2008, pp.9-14 より訳出し作成。)

(3) 技能・能力

OCR の試験で評価される技能・能力は以下のとおりである。AO3：聴取・評価技能は聴取の試験以外の評価項目である¹⁶。

表 6 OCR の評価対象とその評価項目

評価対象	評価項目	
	ソロ	アンサンブル
AO1 演奏技能	<ul style="list-style-type: none"> ・なめらかさ、技術のコントロール (なめらかさ、ピッチとリズムの正確さ、音楽の要求に答える技術、自信、抑揚と音色) ・コミュニケーションと解釈 (演奏する曲に対する理解、強弱、アーティキュレーション、伝統的手法の適切さ) ・難しさ (演奏する楽曲の難易度) 	<ul style="list-style-type: none"> ・なめらかさ、技術のコントロール (なめらかさ、ピッチとリズムの正確さ、音楽の要求に答える技術、自信、抑揚と音色) ・解釈とアンサンブルへの気付き (グループにおける自分の役割への気付き、バランスを取りながら他のパートに合わせる、演奏全体に対する貢献) ・難しさ (演奏する楽曲の難易度)
AO2 作曲技能	<ul style="list-style-type: none"> ・音楽的な一貫性、様式的な一貫性がある。 ・創造的で独奏的なアイデアを有している。 ・音楽の諸要素の適切な使用がなされている。 ・作曲の技法を適切に使用している。 ・構造によって楽曲が支えられている。 	
AO3 聴取・評価技能	<p>【レポート】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分が演奏する楽曲の背景と、楽曲における自分の楽器の役割を理解している。 ・楽曲の演奏で使用される奏法について理解している。 ・演奏の質について述べることができる。 ・作曲で用いた奏法などについて短い文章で記述できる。 <p>【自己評価】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・作曲の意図が音楽的に考えられ、詳細に述べられている。 ・作曲した曲の音楽的な影響を理解している。 ・音楽的な理解を有しているか。 	

(OCR, GCSE music Version1 September 2008, OCR, 2008, pp.58-81 より作成。)

2. 評価

評価を構成するユニットは「ユニット1：統合的課題」、「ユニット2：実践的ポर्टフォリオ」、「ユニット3：創造的課題」、「ユニット4：聴取の試験」の4つである。

「ユニット1：統合的課題」は、演奏、作曲、レポートから構成され、すべて「学習領域1：私の音楽(私の楽器に焦点を当てて)」と関連するものである。受験者は、ソロかアンサンブルの楽曲を1曲演奏する。また、自分が専門とする楽器が使用されている楽曲1つについて、楽曲の背景や楽曲中における楽器の役割、使用されている奏法などについてレポートを書く。さらに、自分の楽器で演奏できる曲を1つ作曲する¹⁷。演奏が30点、作曲が10点、聴取・評価が20点で採点される。

「ユニット2：実践的ポर्टフォリオ」は、グループ演奏1曲、作曲または編曲1曲、自分の作品の自己評価から構成される。作曲または編曲の課題は以下から1つを選択する¹⁸。作曲または編曲は1曲である。

- ・2人以上のグループで演奏することを目的として作曲または編曲する。
- ・任意の様式に基づくダンス音楽を作曲または編曲する。
- ・出来事の進行や雰囲気合った標題音楽を作曲または編曲する。

ユニット2でも、演奏が30点、作曲が10点、聴取・評価が20点で採点される。

「ユニット3：創造的課題」では、OCRによって設定された課題に基づいて短い曲を1つ作曲し、それを演奏する。課題は以下から1つを選択する¹⁹。

- ・リズムカルなフレーズ(2/4, 3/4, 4/4, 6/8のいずれかで、2小節で示される)

¹⁶ AO3：聴取・評価技能の評価項目については、「ユニット1：総合的課題」と「ユニット2：実践的ポर्टフォリオ」で示されている評価基準から作成した。音楽の知識・理解を測定する「ユニット4：聴取の試験」はこの表に含めていない。

¹⁷ OCR, GCSE music Version1 September 2008, OCR, 2008, pp.23-24.

¹⁸ Ibid., p25.

¹⁹ Ibid., p27.

- ・音のパターン（9つまでの音を使用し、楽譜で提示する。階名が付されている）
- ・メロディックなフレーズ（8小節で提示され、第2声部を加える）
- ・コード譜（5つまでの和音で、コードネームとタブ譜で示される）
- ・歌詞（長さは8行程度の歌詞が提示される）
- ・出来事の推移を描写した音楽

ここでは、演奏10点、作曲20点か作曲のみで30点で採点される。

「ユニット4：聴取の試験」は、音楽聴取を伴う筆記試験で、「学習領域2：共有された音楽（音楽的な関係性と規則）」、「学習領域3：舞踏音楽」、「学習領域4：描写的な音楽」に関する知識・理解について問われる。配点は100点である。

各ユニットにおける評価対象の配点比率、内部評価・外部評価の割合は表7のとおりである。OCRの場合、改訂前のシラバスにおいても内部評価と外部評価の割合が60%：40%で変化はない。

表7 OCRの評価計画

ユニット	評価対象の配点比率 (%)			合計	評価主体
	AO1 演奏技能	AO2 作曲技能	AO3 聴取・評価技能		
1：統合的課題	15	10	5	30	内部
2：実際のポートフォリオ	15	10	5	30	
3：創造的課題	5 0	10 15		15	外部
4：聴取の試験			25	25	

(OCR, GCSE music Version1 September 2008, OCR, 2008, p.31 より抜粋。)

ユニット3の創造的課題は演奏と作曲合わせて15%か作曲だけで15%かを選択することができる。そのため評価対象の配点比率は、AO1：演奏技能35%、AO2：作曲技能30%、AO3：聴取・評価技能35%かAO1：演奏技能30%、AO2：作曲技能35%、AO3：聴取・評価技能35%のいずれかを選択することとなる。

V. 考察

評価対象については、全国標準の記述に多少変化が見られたが、シラバスの評価項目からその捉え方には大きな変化は見られなかった。

評価活動の対象となる学習領域については、AQAが5つ、OCRが4つの学習領域を設けている。それぞれの以前のシラバスを比較するとその構成が少し変化している。AQAでは学習領域の構成がテーマによるものから、音楽の諸要素によるものへと変化した。このことから、以前よりも音楽の諸要素に関して知識・理解の定着を意識したものになったと言える。OCRでは、改訂前と同様、学習領域がテーマによって構成されている。自分の楽器を探究するという学習領域は維持され、それ以外の3つが変化した。どの学習領域も音楽に影響する諸要素の探究に重きが置かれている。

音楽科の内容として、演奏や作曲の技術習得の他に、音楽史の学習が挙げられる。双方のシラバスでは、西洋クラシックを含む多様な時代やジャンルの楽曲が教材例として掲載されている。しかし、学習領域を中心とした学習であるため、断片的な取り扱いになることが予測され、その点ではQCAが報告書で指摘した問題点を克服するものではないと考えられる。

AO3：聴取・評価技能は、筆記試験によって音楽の知識・理解の定着が測定される。AQAの2010年試験シラバスではAO3：聴取・評価技能の配点比率がわずかに減少し、AO1：演奏技能の配点により重きが置かれた。したがって、演奏活動を重視し、演奏により深く関係した知識・理解を重点化していることがわかる。一方、OCRはAO3：聴取・評価技能の配点比率をAQAのものよりもやや高く設定している。演奏技能に少し重きを置くものと作曲技能に少し重きを置くものと2つの型を採用しているが、演奏技能や作曲技能の配点比率が聴取・評価技能の配点比率を上回るものではない。今回の改訂で、外部評価と内

部評価の割合については規定が設けられた。しかし、各技能の配点比率は厳密に規定されていないため、評価の統一に向かってはいるものの、各試験団体の独自性は保持されていると言える。

AQA の場合、内部評価で使用する採点基準は、これまで楽器に関係なく 1 つの採点基準が使用されてきた。今回の改訂でソロの評価基準を 2 種類設けたことも 1 つの変化である。生徒たちの演奏形態は、一般的な楽器だけでなく音楽テクノロジーを含めて多様であることが報告されており、今回の変化は生徒の実態を考慮したものであると考えられる。

VI. おわりに

本稿では、2007 年に改訂された全国基準に基づいて作成された新シラバスを検討することで、内容と評価の変化を明らかにした。しかし、2010 年に実施された試験問題や試験官報告書は検討しておらず、新 GCSE 試験に移行してからの試験の実態は明らかにできていない。また、音楽科教員や社会の反応も明らかにする必要があるだろう。このことは今後の課題としたい。

<参考・引用文献>

- Assessment and Qualification Alliance, GCSE Specification Music, for exam June 2010 onwards, for certification June 2011 onwards, Assessment and Qualification Alliance, 2008.
- 松下友紀「GCSE 音楽の全国基準の変遷」『音楽文化教育学 研究紀要』X X I, 2009, pp.161-170。
- Oxford Cambridge and RSA Examinations, GCSE music Version1 September 2008, Oxford Cambridge and RSA Examinations, 2008.
- Qualifications and Curriculum Authority, A review of GCSE coursework, Qualifications and Curriculum Authority, 2006.
- Qualifications and Curriculum Authority, Teachers' Views on GCSE Coursework Research Study Conducted for the QCA final report, Qualifications and Curriculum Authority, 2006.
- Qualifications and Curriculum Authority, Controlled assessment, Qualifications and Curriculum Authority, 2007.
- Qualifications and Curriculum Authority, GCSE Subject Criteria for Music, Qualifications and Curriculum Authority, 2007
- Qualifications and Curriculum Authority, Improving GCSE: internal and controlled assessment, Qualifications and Curriculum Authority, 2007.
- Qualification and Curriculum Authority, Review of standards in A level and GCSE music, Qualifications and Curriculum Authority, 2007.
- Qualifications and Curriculum Authority, GCSE controlled assessment regulations, Qualifications and Curriculum Authority, 2008.
- Qualifications and Curriculum Authority, Teachers, headteachers, seniors, local authorities, Change to GCSEs, Qualifications and Curriculum Authority, 2008.

<参考 web 資料>

- Assessment and Qualification Alliance <http://www.aqa.org.uk>
- Office of the Qualifications and Examinations and Examinations Regulator <http://www.ofqual.gov.uk>
- Oxford, Cambridge, and RSA Examinations <http://www.ocr.org.uk>
- Qualifications and Curriculum Development Agency <http://www.qcda.gov.uk/>